語り継ぐ 被爆体験

「父が伝えたかったこと」

諏訪市公民館講座

伝えたい 戦後80年 過去から未来

長野県原爆被害者の会副会長 前座さんが講演

諏訪市公民館の三者共催・一般公開講座「昭和100年、戦後80年を迎えて～被爆体験の父が伝えたかったこと～」は25日、市文化センターホールで開かれた。長野県原爆被害者の会（長友会）副会長で、日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）全国理事を務める前座明司さん(77)＝松本市＝が講演、約60人が聴講した。前座さんは、亡くなる直前まで核兵器廃絶に向けた証言活動に力を注いだ父の言葉を交えながら、被爆体験を語り継ぐ大切さを伝えた。

（丸山智永）

「被爆体験の父が伝えたかったこと」と題して講演する前座明司さん

前座さんの父・良明さんは、広島に原爆が投下された1945年8月6日午前8時15分、爆心地から4キロ離れた陸軍船舶司令部にいた。家屋や財産すべてを失ったが、救護活動に加わり、死体処理をしたという。傷口にうじが湧き、かゆいかゆいと助けを求める人。水を欲しがり、飲んだとたんに息絶えてしまった人―。前座さんは父の壮絶な体験を語った。

同年10月に松本市に移住した父は、体に異常なだるさを覚え、その影響で職を転々としていった。54年の米国による水爆実験をきっかけに原水爆禁止運動が広がったことで、被爆が体の不調の原因と知ることになったという。前座さんは「原爆に対する憎しみが沸々と湧いてきた」と当時の父の心情を推し量った。56年に長野県原水爆被災者の会（現被害者の会）の結成に加わると、58年からは会長を務めた。

その後、松本に食堂「ピカドン」を開業。来店する若い人たちには被爆体験を語り、広島、長崎出身者も多く訪れたという。長友会では、88歳で亡くなるまで被爆者運動の先頭に立ち続けた。県内の被爆者の体験や訴えを語り継ぐことに力を入れ、証言を集めた書籍「生き続けて」は第4集まで刊行されている。

前座さんは「被爆者にとって、語ることは追体験でありつらいこと」。それでも語るのは「皆さんを、自分たちのような悲惨な目に合わせたくないから」と、父が盛んに使っていた言葉を用いて証言者たちの思いを代弁した。

県内の被爆者数（被爆者健康手帳所有者、昨年3月末現在）は82人で、高齢化が進んで体験を語れる人が少なくなっていると指摘。最後に「今日の聞き手は明日の語り手」と、父の言葉を引用し、子どもや孫など1人でも多くの人に伝えていってほしいと来場者に呼び掛けた。